

論説

「確かな学力の育成を目指した指導の工夫・改善（書道）」

● 上越教育大学助教授 押木秀樹

1. 意欲を高める取り組みへの評価

高等学校における芸術科目の選択時、生徒たちにとって書道は堅苦しいイメージがあったのではないかと思われる。もちろん、それは履修開始の段階のことで、授業の履修を終えた段階では、必ずしもそうでなかったはずである。学習活動を進めるにあたり、履修開始時の学習意欲は、その後の学習活動の成否にも関わる重要なポイントである。そのため、ここ数年の授業研究会などでは、さまざまな導入の工夫や生徒たちが意欲的に取り組むための活動の工夫が研究報告されている。具体的には、次のような事柄があげられる。

- ・ 用具用材の工夫〔例：手作り筆・手漉きの紙・ガラスなど〕
- ・ 書く題材（ことば）の工夫〔例：ヒット曲の歌詞など〕
- ・ 掲示・展示の意識化〔例：手作り額で飾るなど〕
- ・ 書く活動と他の活動との組み合わせ

〔例：伝統的な刻字などの他、絵や音楽との組み合わせなど〕
その他、具体的に紹介しきれないのが残念なほどである。それらは、研究会等の特定の場合だけではなく、日常の授業において多くの学校で取り入れられ、効果をあげていると聞いている。実際にそれらを取り入れることで、生徒たちの目が輝いている様子が十分に想像できる。

一方、研究会における意見交換において、生徒たちは「楽しい」活動をするであろうが、それが本来の「書道の学力」とどう関わるのかという意見も聞かれる。意欲の向上を、書道の学力の高まりにどうつなげていくのかという議論である。また同時に、「漢字仮名交じりの書」の問題、書写能力と書道の学力との関係なども、聞かれるところである。

本稿では、これらを踏まえ、「生徒らの日常における書くこと」の考察を出発点として、書道の学力の内「表現の意図と表現力」「表現に対する感性」を中心として、現代において求められる学力である「個を認め合う力」「より良いものを目指す心」「思考し判断する力」への方向性について理論面から考えてみたい。

2. 書道の学習構造と課題

学力は一般に、学習活動の前後における学習者の変容と捉えることができる。変容には、知識の量や、たとえば計算能力といった処理能力の向上等があげられる。また活動それ自体を学力と捉える見方もある。書道の場合、学習指導要領（平成十一年三月）の表現を借りるならば、表現力・鑑賞力・書の知識といった「学力」を、用具用材から字形・全体構成等々の「要素」について、表現・鑑賞といった「活動」が支え、それらが書を愛好する心情などを育んでいると考えられる。表現という活動に着目すれば、創作および臨書という行為について、主体的構想に基づく表現活動、古典や名筆の鑑賞に基づく表現活動がおこなわれることになっている。以前より生徒の主体性を重視する方向性は強まっているものの、基本は従来から変わらない安定した書道の学習構造とあって良いだろう。とすれば、今あらためてその学力を問い直す必要があるのはなぜなのか。

その一つは、先に述べた現代の高校生の学習意欲との関係である。同じ表現力を養うにしても、従来の方法とは違った活動でなければ、生徒の積極的な学習活動に結びつかないという声が聞かれる。また鑑賞力との関係においても、生徒の感性を高める方策について、いきなり古典から入るのではなく、授業開始時に生徒が持つ感性から

スタートさせなければならぬという声が聞かれる。いずれにしても、生徒の日常に近い活動であること、生徒の日頃の感性からという点の一つのキーになるようである。そのことが、伝統的な書道の学力観からすると、「真の学力に結びつかない」といった声につながっているのかも知れない。ただ、この点については、書道特有の問題ではなく、音楽・美術・工芸においても同様といえよう。

二点目は、「漢字仮名交じりの書」についての問題である。これは書道独自の問題として、近年多くの議論がなされてきた。この問題について、先の「要素」「活動」という視点で検討してみたい。用具用材から字形・全体構成等々の「要素」の部分は、指導者がイメージするのもそう難しいことではないだろう。「活動」という点では、臨書が問題としてあげられるが、この点も漢字や仮名の古典を臨書することで、「漢字仮名交じりの書」の表現力を高める工夫がおこなわれている。ただ、「名筆の鑑賞に基づく表現の工夫」といった場合に、「漢字仮名交じりの書」の名筆というものが、歴史的淘汰を経ていないことは、確かに気になる点である。言い方をかえるならば、「漢字仮名交じりの書」においては、「型（カタ）」（中国風にいえば「法」）とでもいうべき、共通して捉えられるスタイルが不明瞭だということだろうか。しかしそれ以上に、筆者としては気になる点がある。書は、歴史的にみてかなり長い間、文章を書く・文字を書くということに寄り添った「用の美」の性格を持っていた。ところが、毛筆の使用が日常でなくなり、書の素材であった漢詩・漢文・和歌などが日常でなくなった。その日常から離れたところで確立されてきたのが、現代の書とも解釈できる。そのことは、デメリットであったかも知れないが、一方で表現上のメリットであった可能性もあ

る。そのうち、毛筆という非日常を残し、素材だけを「漢字仮名交じり」という日常に戻そうとする試みへのとまどいが、根底にあるのではないだろうか。先にあげた点と同様、ここでも「日常」ということがキーになっているように思われる。

三点目は、学習指導要領・書道Iにおける「書写能力を高め」という点である。以前から、「書道I」において小中学校国語科「書写」との関連を計ることが、生徒の学習意欲の向上につながらないという声を聞いている。国語科書写の学力を、「正しく読みやすい字を、目的や必要に応じて（調和良く、また）速く書く能力」と捉えるなら、字形や「目的や用途に即した形式」といった「要素」の部分である程度的一致を見ても、「活動」という点で表現（創作・臨書）や鑑賞とはずいぶん異なってしまう。書写における「読みやすい字」という方向性も、日常において文字を書くことを意図したものであり、ここでも「日常」がキーになるように思う。

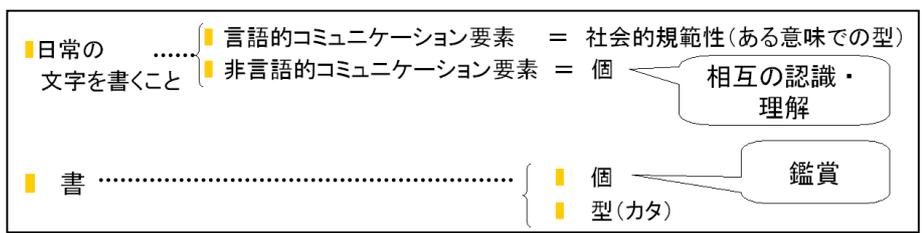
3. 文字を書くことと書く書写と書道の関係をどう解くか？

まずはこの「日常」というキーワードを、筆者なりに解釈してみたい。小中学校書写の目的とする活動と、高校芸術における表現に関する活動について、両者の関わりを考えるために、いったん両者において共通する点である「文字を書く」というレベルで考えてみることにする。

日常の「文字を書くこと」を、図のように考えてみる。簡単に説明すると、文字を書くことは、ことばを伝え記録するというコミュニケーションであり、そのためには社会的に通用するための正しさと、読みやすさが求められる。その社会的規範性を学力として位置

づけているのが、小中学校書写といえよう。ただし、「文字を書くこと」におけるコミュニケーションにおいて、伝達されているのは「ことば」そのものだけではないはずである。話す・聞くという点で考えるならば、対面して話す時には表情や身振りや、電話等で話す時には声の調子などが伝わっているはずである。何より、その人の顔が見えるだけで、その人の声であるというだけで、我々は確実に何かを感じ取っている。それらを非言語的コミュニケーション要素と呼ぶならば、それは手で書かれた文字にもいえるだろう。手で書かれた文字における非言語的コミュニケーション要素としては、その人らしさや書いた時の感情・状況その他が推測される。これらは、情報機器の普及に伴い失われがちな、人と人との理解に大きく寄与している可能性がある。

日常の書くことにおける非言語的要素と、「書」とがどう関係しているだろうか。率意の書、たとえば蘭亭序でも良いが、それらの多くは序文なり尺牘なりのことばの伝達記録を意図して書かれたものといえよう。そこに内包された非言語的要素が「美」というレベルに昇華しているのだと説明できる。では、書写と書道の連続という点において、疑問が投げかけられるのはなぜだろうか。小中学校国語科書写は、児童生徒の書く文字がより社会的規範性に適合するものであることを目指している。そのことは、小学校・



中学校の学習指導要領からも明らかであるが、一方でそれら学習指導要領が「非言語的要素」を否定しているかといえば、そのような記述もない。ことばを伝えるという機能以外を、目的としていないだけなのである。もう一度、高等学校学習指導要領の書写に関する記述をみると、「書写能力を高め」とある。生徒の持つ「書写能力」は、中学校学習指導要領の意図するところの言語を伝わりやすくする要素だけではなく、非言語的要素を含むものとして捉えることが、現代において重要なのではないだろうか。

このように文字を書くことを捉えた場合、「文章や文字を正しく読みやすく書く」と「活動」と「創作」する活動との違いはあるが、ともに非言語的要素として個やその場の状況、その時の感情が存在する点で共通することがわかる。前者がその点において消極的であり、後者は積極的であるということである。また、前者において求められる「社会的規範性」に類似する点として、書においてもある程度の型（カタ）が存在することがあげられる。大きな括りでいえば書体もその一つであり、一般には代表的な古典に見られる書風がそれに該当する。特に書の場合は、絵画におけるような対象物が存在せず、字体という抽象的な概念を題材とするわけであるから、少なくとも字形を見て学ばねばならず、臨書もその点から重要視される。もちろん書に限らず芸術一般において、ある種のスタイルやパターンが存在するという意味では、型の存在を否定できないし、書の特殊性とはいえないはずである。そのことから、社会的規範性と型とが、書の足かせとなっているとは考えにくい。ただし、コミュニケーションにおいて情報機器が用いられるようになり、非言語的要素のうち社会的規範性や型を求める気持ちから、「個」（状況・感情・

意図等を含む）を求める気持ちの比重が重くなって来ているという現状理解は必要だと考える。

4. 楽しさと学力、個を認め合う力・より良いものを目指す心

日常の書くことに表れる「個」からスタートするという活動は、重要であろう。もちろんそれは単に「自由に書きなさい」という指示による活動をするという意味ではない。単なる「自由に…」は、ある生徒にとっては楽しい活動であっても、ある生徒にとっては極めて難しい指示であり苦痛さえ感じることが、我々は知っている。ましてや、その活動自体が確かな学力への方策のように思えない。筆者が述べたいのは、その時点で生徒が持っている書写能力、誤解を避けるなら、その時点で生徒が手で書いた文字、そこに一人一人の差があり、それを認めあうところから活動をスタートさせることができないかということである。一人一人に差があること、わかりやすく個性でも癖でも良いが、それらを認め理解しあう活動、すなわち先の図における「相互の認識・理解」は、それ自身が「個を認め合う力」として現代に必要な一つの学力であり、次の段階における鑑賞にもつながるはずである。

その際、生徒は他の生徒の字を認めることができても、自分の字についてなかなか認められないという傾向がみられないだろうか。日本人一般において、他の人の字の特徴を「味」「その人らしさ」と捉えることができても、自分の字に対しては「癖」「下手なだけ」といった見方をする傾向があるようだ。もし、多くの生徒にその傾向が見られるなら幸いである。そこには、「こうありたいと思う自分」の意識が芽生えているからである。もちろん、「今の自分」を否定す

るのではなく、今は今として認めた上で、どのように変えていくかという方向性にしむける授業の展開が、「より良いものを目指す心」というこれも現代に必要な一つの学力の育成そのものであると考える。

このことについて、二つ補足をしておきたい。一つは、「型」の画一性意識からの脱却という点である。生徒たちの理解として、毛筆で書く際のお手本は、唯一のお手本という型があるのだと思われるようなものである。一方、書における型は当然のように多様であり、生徒一人一人が目指す良さも多様でよいことである。この点をいかに生徒たちに理解させることができるかは、その後の展開に重要であり、担当の先生方も留意されていることと思う。念のため付け加えておけば、国語科書写においても、社会的規範性という意味での型は必要とされるが、それは画一的なお手本のような字という意味ではない。書写教科書のいわゆるお手本は、確かに画一的な感があるが、それは児童生徒に対し特定の書風といった狭い型を押しつけるのではなく、児童生徒が持つ個人的特性を社会的規範性に近づけるという目的のためにあのようなスタイルを取っている、と考えるべきである。

もう一点は、毛筆と硬筆との関係である。この百年の間、毛筆は非日常であり、硬筆は日常の実用筆記具という位置づけであった。現在も、そのことには変わりはないのであるが、一般社会において日常の書く用具として情報機器の比率も増している。情報機器は、非言語的な要素を伝えることが難しい用具であることから、次のような捉え方もできるだろう。硬筆も毛筆ともに非言語的要素を伝えるのに適しているが、特に毛筆は硬筆で表現しうる要素を何倍に

も増幅して表現できる装置だと捉えたらどうだろうか。もちろん、うまい下手といった要素も増幅するが、それだけではない、個や表現意図などを増幅することを意識化させたい。

5. 意図の形成くこうありたい自分の形成く

今の自分を認めた上で、どのように変えていくかという点を考えねばならない。では「意図に基づく表現」といった場合の、意図はどのように形成されるであろうか。活動のための動機、作品に求められるテーマとして考えてもよい。それらは大きく、外的なもの、内的なものに分けることができるであろう。外的な例としては、たとえば「目的や用途に即した形式と表し方」という要素との関係から、「部屋を美しく飾るために書く」といった用途の意識化も近年見られる方向性である。一方で、こうありたい自分を明確にすることができれば、それは内的な動機付けによる意図の形成となるはずである。こうありたい自分の出発点は、日常の自分であるかも知れないが、一つの作品を作り終えた自分を出発点として、積み重ねていくこともできる。また、優れた作品の鑑賞をきっかけとして創作につなげていくことも、従来からおこなわれてきた。その際、単に臨書・倣書といった捉え方ではなく、今の自分の字・作品と比較することで、こうありたい自分として対象を意識化する方策も考えられる。

6. 技法・題材を選ぶ力と漢字仮名交じりく思考し判断する力く

意図の形成後、どのように表現するかという段階は、思考し判断する力の形成として意識化することも有意義だと考える。筆者はこ

の部分について、従来からの用具・字形・構成といった要素を検討していく学習活動で考えて良いと思うのだが、「漢字仮名交じり」という日常性の問題だけは、考察しておきたい。

書の素材としてのことばは、ここしばらく漢詩・漢文・和歌等の非日常のことばであった。一方、音楽はジャンルにより、歌詞という形で日常のことばも扱ってきたわけであるが、その例を参照することはできないであろうか。大野修作氏は狂草の成立に関する説明において、「書を通して詩文を演奏しているのであって、他人の詩文を書くことが中心になっている」としている。（『書学を学ぶ人のために』連載第十六回『書道美術新聞』第八一二号）もちろん大野氏の全文の主旨からすれば、そのことを一般の創作活動といきなり結びつけることには問題があるのだが、ここではあえて考察を続ける。大野氏のように詩文を曲、書く活動を演奏と対照させても良いだろうが、詩文を歌詞、字形や構成という曲を作って、運筆することとが演奏（歌うこと）と対照させることもできるだろう。ポップスであろうと、合唱曲であろうと、作曲者のオリジナリティとともに、歌詞と曲とがマッチすることがある程度求められ、そして演奏者の個性が加わってくる。「漢字仮名交じりの書」の題材の選び方、技法の要素の選び方として、このようなイメージは生徒にとっても容易なものではないかと考える。また、私自身は音楽の経験も知識もないが、たとえば日常のポップスから入って、非日常の音楽の発声法を学び、合唱曲を歌った時と、いきなり合唱曲を歌うのでは感性も表現力も違っていることと思う。

ポップスなどは生徒らも日常耳にする機会が多いだろう。一方、近年筆で書かれた文字を日常生活で目にするように思っても、果た

してそれがヒットするポップス並みのセンスに到達しているかという点、残念ながら必ずしもそうではないように思われるが、いかがだろうか。センスの良さが感じられる「漢字仮名交じりの書」の作品は、今のところ音楽でたとえるなら合唱曲のような位置づけにある作品にとどまっているように思える。しかし、生徒らがもっているセンスを生かし、書について思考し判断する力を向上させることで、将来的にはまた新たな文化が形成されるのではないだろうか。

7. まとめにかえて

芸術教科は、人と人との関係を適切に構築する力や、より良いものを目指す心の育成といった現代における重要な意義を持ち、学力を支えている。加えて書道は、情報機器の普及によって希薄となりがちなコミュニケーションと「ことばを書く」という点で深く関係することから、その役割は大きい。本稿は理念のレベルにとどまるが、伝統に根ざしかつ現代に即した確かな学力が、主体性をもって活動する中で育まれることを期待したい。